

拗音に見る非対称性

高山 知明*

Asymmetry of medial approximants j and w in Japanese

TAKAYAMA Tomoaki*

SUMMARY: This article primarily surveys several phenomena that are derived from the asymmetry between CjV and CwV in the Japanese language: the historical processes of Sino-Japanese forms CjV and CwV, the vowel coalescences of Vu and Vi (iu, eu vs. ui, oi), the contracted forms having CjV, etc. Secondly, we discuss the relationship between the asymmetry of the two medial approximants j, w and the characteristics of the Japanese vowel system that give rise to another asymmetry between palatalization and labialization. Finally, we mention residual issues on the asymmetry of two medials, mimetic expressions having medial j and w, the history of the w-consonant, and so on.

キーワード：拗音，漢字音，母音融合，長音化，母音体系，口蓋性，唇音性，ワ行子音

0. はじめに

本稿は、二つの拗音 CjV と CwV (開拗音と合拗音)の間の非対称性に関わると考えられるいくつかの現象とその問題点について概観する。

ここで取り上げる現象の多くは、日本語音韻史の分野においては既によく知られており、それに関する問題点についても個々には議論されてきたものである。本稿では、従来の議論を踏まえつつ、それらを非対称性の観点から横断的に見ていく。その概観を通じて、拗音に関する日本語(その中心となる和語)の音構造の一面に光を当てる。本稿の目的は、新規の結論を導くことよりも、諸現象を包括的に俯瞰することによって、問題のありかを明確化することである。その目的のために、これまでの取り扱い方にこだわらず、独自のやり方に従って各現象を整理し直す。以下に示すようなやり方で拗音の全体を概観することは、意外にも、従来なされていないのではないと思われる。本稿としては、個別に論じられてきた問題をいかに統合するかにとくに関心を

払っている。

ここで取り上げる非対称性は、直接的には、普遍的特性としての非対称性そのものではなく、個別言語中に、ある種の偏りとして見られるものである。この非対称性が、具体的にどのような普遍的特性と関わりを持つのかについては、当面、本稿の考察範囲外に置いている。この点に関しては今後の研究に委ねることにし、本稿は、普遍性に関する考察を行なう上で、個別言語の一つのありようを提示するものとして位置付けられる。ただし、許される範囲内で、音韻論一般に関わる問題についても若干言及する。

拗音は、文献の上から、その存在を古代語(和語)の中に確かなかたちで見出すことができないために、漢語の移入にともなって発生したのではないかとされている。しかし、日本語の側にも、漢語の複雑な音節構造を受け止めるにあたって何らかの下地が存在していたのではないかと、例えば、擬声語・擬態語や話し言葉の実際の中にその存在を想定しうるのではないかと指摘されている。従来に比べると、漢語の影響に依るとする素朴な見方よりは、日本語の素地を想定する見方のほうが有力になっていると

* 金沢大学文学部助教授 (Associate Professor, Faculty of Letters, Kanazawa University)

拗音に見る非対称性

思われる¹⁾。今後の課題としては、日本語側に存在したと想定される素地をどのように理解するかであろう。

なお、本稿では、諸方言の多様なあり方までを詳細に取り扱うことは困難である。その点に関しては行き届かない部分のあることを最初に断わっておく。

1. 二類の拗音の非対称性

一般には、拗音といえば、「サ」「ヌ」「コ」「ハ」などの直音に対し、「シャ」「ニュ」「キョ」「ヒャ」のように口蓋性の medial j を持つ類（開拗音）を指すが、音韻史、および諸方言について論じる場合には、w を持つ類（合拗音）にも触れる必要があり、この二つの総称として「拗音」と呼ぶことがある。

CjV（開拗音） CwV（合拗音）

本節では、具体的な現象を横断的に見ながら、二類の拗音に見られる非対称性を確認していく。

1.1. 漢字音に見る拗音の非対称性

漢字音に関して見ると、現代語において、開拗音 CjV がその頭子音にワ行(w)以外のすべての子音が現われるのに対して、合拗音は、これを持つ方言においても、「火事(クワジ)」「二月(ニグワツ)」など、出現可能な配列は kwa, gwa のみで、要するに次の場合に限られている。

頭子音 C=k, g, かつ、後続母音 V=a

しかし過去においては、次に示すように、aに加えて i, e の場合にも kwi, gwi, kwe, gwe の合拗音を持つ漢字音を存在させていた(下記は呉音系字音)。

具体例：鬼(クヰ), 偽(グヰ), 華(クヱ), 券(クヱン), 外(グヱ), 還(グヱン), など。

その母音の現れ方を整理すると、CjV のそれと次の

ようにきれいな対称をなす。

CwV に現れる母音 i e a

CjV に現れる母音 a o u

今、medial の要素 j, w をそれぞれ音声学的に母音 i, u に対応する glide として見れば、j を前舌、w を後舌と位置づけることが可能である。すると、両拗音ともに、medial とそれに続く母音 V の配列において、前後舌に関して同じ特徴を連続させないという共通の原則で構成されていることがわかる。要するに [前前] [後後] の配列が避けられており、その結果が上のような対称性となって現われる(ここで母音 a は中舌と位置づけることにする)。

しかし、具体例に見るように、CwV の頭子音はこの場合も k, g に限られている²⁾。しかも、kwa, gwa 以外は、概ね鎌倉時代以後失われてしまっている。結局のところ、日本語の音韻体系内に一定の位置を得ることなく終わったと考えられ、一方の開拗音 CjV が、「百ヒヤク」「取シュ」「驚キヤウ(→キョウ)」など例に示すまでもなく、日本漢字音の型として根を下ろし、今日にまで至っているのに比べると、大きな差異を見せている。このように、j に対して w の拗音が安定しなかった点に両者の非対称性が認められる。この違いについては、その意味するところがこれまでも議論の対象になってきた³⁾。今見た限定的な現れ方と消滅に向かう歴史的過程とから、合拗音には、開拗音に比べて、それを安定化させ得るだけの日本語の内部的条件が欠けていたと推測される。反面、開拗音にはそれを支える基盤が和語の側に存在していたということになる。

なお、この点を考える上で、文献には現れる合拗音が、現実の日本語の中では、どのように実現されていたのかという問題は重要である。もし、合拗音の字音が、仏典や漢籍に関わる特定の場では忠実に学習されていたとしても、場を日常の言語使用に移した際には、果たしてどうであっただろうか。そのような場による差異は現代語について見てみると開拗音 CjV の一部にも起こっていて、仮名に反映されることはなくとも、「出力(シツリョク)」「手術

特集「音韻構造における非対称性」

(シュヅツ, シジュツなど)」(cf. 「出 シュツ」「術ジュツ」「手 シュ」) のような、拗音を明確に(あるいはまったく)実現しない発音が普通になっている。これと類似の事態が kwe, kwi, gwe, gwi に早い段階で現われていたのかもしれない。あるいは、当時においては、言語層の違いに起因する問題として捉えた方が適切であるかもしれない。これらの点は目下の研究課題になっている⁴⁾。

1.2. 母音融合に見る拗音の非対称性

前節では、漢字音における二類の拗音の現れ方について見た。ここでは、その非対称性を日本語内部の音韻変化を通して、さらに確認することにする。対象として取り上げるのは母音連続の融合変化である。

母音連続の中でも、-iu, -eu, -au, -ou の Vu の類はそのすべてに融合変化が生じているが、このうちの -iu, -eu は次のようにいずれも拗音(頭子音がゼロの場合はヤ行音)に変化している。本節のねらいは、前舌後舌の特徴に関して二母音の間で隔たりのある -iu, -eu が比較的容易に融合を生じた背景と、拗音の問題との関係を考えようという点にある。

-iu > -ju:

-eu > -jo:

広狭の隔たりの大きい -au が、最終的に -ou (>o:) の類と合流するのは室町末期ないし江戸初期であり、こちらがかなりの時間を要しているのに比べると、-iu, -eu はより早い段階で -juu, -jou の類と合流している(漢字音に関する混乱例については沼本(1986)参照。エウの混乱例は平安末期のものが指摘されている)。

元来、和語においては、同一形態素中に母音連続を持つ語は原則的になかったが、以下の①②の結果、その語数が大きく増えている(以下には -iu, -eu の例のみ掲げる)。

①母音間のハ行子音の接近音(w)化

V_V の位置で ϕ が w に変化。これにより、V ϕ u

は Vu に変化。

例 けふ→けう(今日), いふ→いう(言う), ゑふ→えう(酔う), …

②音便の発生

例 かなしく→かなしう, べく→べう(助動詞「べし」), …

また、漢語(漢字音)には母音連続 Vu を含む形が多数存在していた⁵⁾。さらに①の変化を通して、あらたに Vu を生じた漢字音も少なからず存在するようになっていた(以下に具体例を掲げる)。

十 ジフ→ジウ, 急 キフ→キウ, 業 ゲフ→ゲウ, 葉 エフ→エウ, …

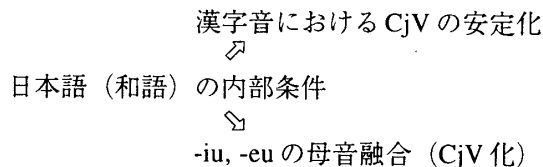
漢字音における開拗音 CjV の存在自体は、Vu の融合変化に先行している。そのため、開拗音が日本語に存在するようになって、そこに融合変化が生じて和語、漢語を問わず CjV の数を増やしたと見ることもできそうに思われる。すでに CjV が存在していれば、その既存の型を利用することで改新が実現可能である。その点で、これらの融合変化は生じやすい条件にあったとする見方である。

しかし、この見方には次の点に問題がある。これらの融合変化は、漢語のみならず、「うつくしう」「今日(けふ→)けう」のような和語にも生じている。もし、開拗音 CjV が話者にとって漢語特有の外来語的色彩の強く感じられる音型であったとすると、和語にもそれがたやすく持ち込まれたとは考えにくい⁶⁾。そこで、これに対しては、以下のように捉えた方が実情により即していると考える。

前節に見たように、漢字音における開拗音には、それを安定的に支えるだけの和語側の何らかの内部条件が存在した。じつは母音連続 -iu, -eu を開拗音の形へと導いたのも、まさにそれと同じ条件であったとする見方である。別の言い方をすれば、和語自体の中に開拗音の発生を容易にするある種の特性が存在しており、それが、一方においては、漢字音における開拗音の型を安定的に存立させ、また、他方においては、日本語の中で数を増やした -iu, -eu を

拗音に見る非対称性

開拗音の形へと導いたということである。その関係を図示すれば次のようになる。



ところで, Vu と対称をなすのは母音連続 Vi (具体的には -ei, -ai, -oi, -ui) である。このうち, -iu, -eu と母音の前後舌に関して対称をなす -ui, -oi について見ると, -iu, -eu と同じようには変化が生じていない。もちろん, それらに変化の生じている方言も存在するが, 総体的に見れば違いを認めるべきであろう。

当然のことながら, 変化の仕方には選択性がある。例えば, -ui, -oi が単母音化して母音体系が変わることも一つの方向である (例えば前舌円唇母音の音素化)。また, これらが, -iu, -eu の融合と同じように拗音化して, -wi:, -we: (つまり CwV) に変化することが考えられる。しかし, -oi, -ui にこのような拗音化が生じにくいとすれば, それには上に述べた開拗音 CjV に指摘できる内部条件がこちら側には欠けており, 漢語の受容のみならず, 母音融合に関しても medial j と w との間に非対称性を認めることができる⁷⁾。

1.3. 融合変化後の iu と ui

例えば「九 キウ」「州 シウ」などを, 中世期あるいは江戸時代においても, 「割って」発音すべきである, すなわち, 母音の i と u とを分けて発音するのがよいとの規範が存在した。前節で述べた -iu の融合で一般化した -ju: に抗して, iu の形を保持しようとの努力が長らくこころみられたにもかかわらず, 結局, 相当に意識しないかぎり, 自然に kju: 等の発音になってしまったようである。

和語の例を挙げれば, 「胡瓜」は少なくとも中世頃までは「き-うり」という形であったらしいが (複合語の構成を有していたらしい), それで「きゅーり」に変わっている。同一形態素内に iu が許容される

ことは原則としてなく, iu では安定しないようである (「胡瓜」にも一単位化が関わっていると考えられる)。

このことは, 現代の外来語についてもあてはまり, 「リウマチ」「シンピジウム」「シンポジウム」「バリウム」「アルミニウム」等, その仮名表記とは無関係に, 日常比較的よく使われる語を中心に「リユー」「ジュー」「ニュー」のように Cju: になる傾向が見られる。果物の kiwi (キウイ, キーウィー) が, 実際にはキューイに引きつけられるのも同じ理由によると考えられる (正確には, キウイ等と明瞭なキューイとの間で浮動していると思われる)。さらにいえば, 今日の中国語の学習において, 介母 i の発音が, 日本語的な拗音にならないように, しっかりと長めに発音するよう注意が喚起されるのも, この傾向と無関係ではないだろう。これらの拗音化もまさしく日本語化の現れといえる。ただし, 外来語に関しては -eu の例が得にくく, 同様の傾向をうかがうことが難しい。

これとは対照的に, -iu と対をなす -ui (あるいは -oi) には拗音化 (合拗音化) の傾向は見られない。ここからも, 二つの拗音の非対称性をうかがうことができる。

1.4. 拗音縮約形に見る非対称性

以上, 開拗音と合拗音との差異についていくつかの現象を通して見てきたわけであるが, 現代語で直接耳にする次のような縮約形もそれらに加えることができると考えられる。

「それじゃ」(←「それでは」), 「いきゃ」(←「行けば (いいじゃない)」), 「こりゃ (どうも)」(←「これは」), …

このように, CjV の縮約形は生産性が高く, 日常会話での使用頻度も高い。また, 注目されるのは, 上の例のように「は」が w の要素を持ちながら, それは脱落し, CjV に置き換えられている点である。

「ぼくは」が「ほかあ」, 「ここは」「そこは」が「ここあ」「そこあ」のような発音も他方はないわけでは

ないが、CjVの縮約形が非縮約形に対して、語形としての確実度が高いのに比べると、これらは「はくは」～「はかあ」の幅で捉えられる段階にとどまっているのではなかろうか。つまり、「はくは」と「はかあ」の二形の並立と見るのは適当ではないのに対して、「それじゃ」と「それでは」は二形の並立と見て差し支えない。

また、歴史的に見ても、「であ (←である)」からヂャが形成されているように、開拗音への縮約化は現代語に限られるものではない。

以上、二類の拗音の非対称性に関する現象を見てきた。開拗音CjVに関しては、いずれの現象も、前掲図に示した「日本語(和語)の内部条件」の反映と見ることができるので、前掲図にさらに1.3, 1.4で触れた事項を加えることができる(図は省略に従う)。

2. palatalization と labialization の非対称性

本節では、二つの拗音CjVとCwVの非対称性と関連すると見られる日本語の音構造上の特性について述べることにする。具体的には、母音の特性との関わりが問題となる。

漢字音における開拗音と合拗音の変遷過程の差をどう説明するかという問題に対して、林(1983)は、日本語における口蓋化を受けた子音の存在を指摘している。つまり、各子音は母音iが続くときには、その影響(assimilation)を受けて口蓋化が著しいため、その口蓋化された子音の存在によって開拗音CjVの定着を容易にしているとする。つまり、口蓋化した子音を他の母音a, o, uと組み合わせることにより、容易に開拗音の形が得られるということであろう。これに対し、合拗音は、日本語には唇音化された子音の存在が欠けていたために、それを定着させる条件になかったと指摘している。この指摘は専ら漢字音を対象としたものであるが、上に見てきた、和語も含めた様々な二類の拗音の非対称性においても深く関わっていると考えられる。

二類の拗音の非対称性は、要するに口蓋化palatalizationと唇音化labializationという二種の二次的調

音の非対称性である。上記の指摘に従えば、日本語においては、それが母音i, uの特徴と連関していることになる。すなわち、直接的には、母音iによる先行子音の口蓋化に対して、uの前では同程度には唇音化が生じないという、子音と母音との結合関係の問題であるが、この違いは、母音体系内でiには口蓋性が認められても、uには唇音性を積極的になかたちでは認められないということから生じる。つまり、二類の拗音の非対称性は、日本語の母音体系における口蓋性と唇音性との非対称的な関係として読み替えることができる。

二次的調音としての唇音化は、一次的調音に付随する、後部舌面の軟口蓋への盛り上がり唇の丸めによって特徴付けられるが、それが顕著でないとすれば、これは日本語のuの特徴とどのように関わり合うのだろうか。日本語の母音uは顕著な円唇性が認められず、中舌の傾向があると言われている(上村・高田(1978), 齋藤(1997), 窪園(1998)など)。もし、こうした日本語のuの性質が唇音化のあり方と関わりを持ち、それが拗音の非対称性となって現われるとすれば、類型論的観点においても、i, e, a, o, uの五母音体系として済ませるだけでなく、その細部に言及する必要がある(母音uの方言による音声的差異をどのように考えるかという問題が当然ながら発生する)。

ここで注意しておかなければならないのは、拗音と母音との関係について今述べたことが、歴史的な意味で、後者が前者の原因になっているということ(必ずしも意味しない点である。ここで述べるのは、あくまで両者の連関性であって、通時的に見て一方が他方の原因であるか否かについてまで明確な答えを出しているわけではない(その点では林(1983)とニュアンスを異にしているかもしれない)。この問題をさらに考えるにあたっては、口蓋性と唇音性のあり方の違い、さらに、口蓋化と唇音化のあり方の違いについて、普遍性の観点あるいは類型論の観点からもさらに考察する必要がある。

なお、日本語のiとuの非対称性に関していえば、aiとauとのあり方の違い(本特集窪園論文)、あるいは、eiとouとのあり方の違いについても目を向

拗音に見る非対称性

けるべきかもしれない。eiとouとの違いについては、高山(2003)でも触れているが、一つだけ例を挙げれば、外来語において前者は後者に比べて、より安定的に現われる。例えば、ペイント、デイケア、ペイオフ、JRなど実際に聞いてみると[eɪ]と実現されることはさほどもずらしくない。反面、同じように外来語形に[ou]が現われることはほとんどないという違いが指摘できる。この場合にiがuに比べて安定して現われやすいとすれば、それはどうしてなのだろうか。そして、そのことは本稿で扱った現象と関係があるのだろうか。

なお、日本語の事例ではmedial j, wと母音i, uとの間に連関性が認められるわけであるが、他の言語においてはmedial (あるいは弁別機能に關与する二次的調音)と母音との間にそのような連関性の認められない事例もあるだろう。そうした言語との相違点をどのように考えるかということも課題になる。

母音とmedialとが関わり合う例として、日本語との対照において興味深い言語の一つに韓国語がある。その母音体系は平唇wと円唇uとの対立を有するが、このことがmedialの体系とどのように関わり合うのか、また、円唇uの存在がmedial wのあり方とどのように関わり合うのかといった点が問題になる。

3. その他の諸問題

3.1. ヤ行子音とワ行子音

本稿では、ここまでヤ行子音、ワ行子音については触れずにきた。果たして、拗音を構成するj, wの要素とヤ行子音、ワ行子音との関係はどのように捉えるべきなのだろうか。このことは一見ごく基本的な問題のようであるが、それぞれの音配列上の現れ方を見ただけでも案外やっかいである。ヤ行子音(ja, ju, jo)と開拗音(Cja, Cju, Cjo)とは、その母音の配列から見て平行的な関係にあるように見えるが、ワ行子音においては、これに対する拗音自体がないわけであるから、同じような平行性が構成されていない。他方において、ワ行子音wがそれほど円唇的でない点は母音uと共通しているという面もある。こ

れらが全体としてどういう関係にあるのか(あるいは関係しないのかも含めて)という問題は必ずしも明確にされていない。開拗音にしても、サ行、ザ行、タ行には「シェ」「ジェ」「チェ」が安定的に存在している一方において、頭子音が付かないje(その意味ではヤ行音)は同程度に安定的であるとはいえない(jが脱落したり、ieになるなどする)。これも、そうした平行性という観点だけからでは解決の難しい問題である。しばしば援用される「体系の空き間」という概念も、これらの問題に対して説明力を有しているわけではない。

また、ワ行子音の歴史的変化に関する諸点について、拗音の問題と関連するかどうかについては慎重な判断が必要である。ただ、注意しておきたい点があるとすれば、一つに、もともと、ヤ行子音に比べて、ワ行子音を持つ語の数が少ないことである。なかでも語頭以外(母音間)にそれを持つ語の数が少ない(「あわ(泡)」「あゐ(藍)」「なみ(地震)」「すゑ(末)」「つゑ(杖)」「あを(青)」「とを(十)」など)。二点目は、ワ行子音の消滅化傾向に関する問題である。10~11世紀頃に生じた母音間のハ行子音の接近音化(1.2で触れた①)によって、「かは(川)」「かひ(貝)」「いへ(家)」などをはじめ、母音間に大量のワ行子音が一旦は増えたはずだが、時期を隔てることなく、wi>i, we>jeと変化している(この変化は母音間でより早く生じている。語頭のワ行子音ではそれが遅れ、最終的な完了は13世紀と推定されている)。この変化の背景についても、まだまだ考察すべき点がある。ワ行子音に関してはとくに、母音間と語頭との条件の違いは重要な問題である。

3.2. 「唇音退化」に対する疑義

本稿で述べてきた合拗音の問題、ならびにワ行子音の問題に関しては、橋本(1942)の指摘する「唇音退化の傾向」を想起する向きもあるかもしれない。

橋本論文は、古代から現代に至る日本語の歴史において、唇を合わせる運動の減退化がいろいろと私たちを変えて現われているとするが、本稿は、これに対して懐疑的である。一番の問題は、唇に関わる

運動の退化が、あたかも体質であるかのごとく、日本語の歴史を方向付ける傾向として論じられている点である。本稿では、合拗音 CwV を支える基盤の弱さを論じてはいるが、それを、唇の運動を弱めていく傾向の現われとは見ていない。変化の方向性という観点からいえば、母音が強い唇音性を獲得する変化も当然起こりうるだろうし、CwV を許容していく方向の変化も選択可能である。

橋本(1942)の「唇音退化の傾向」の眼目は、ハ行子音 $p > \phi > h$ の変化と、ワ行音、合拗音の変化との相互関連性を説くことにある。しかし、ハ行子音の変化とこれらとを結びつけて考えるべきではないというのが本稿の立場である。実際、合拗音 kwa が pa に変化することは(たとえば『ロドリゲス大文典』が記す博多方言)、一般的に見ても充分起こり得る変化であり、しかも、橋本の「唇音退化の傾向」とは根本的に相容れない。

3.3. 文献に現れない拗音の問題

先に述べたとおり、拗音が文献上に顔を出すのは漢字音を通してであるが、そのことを根拠に、和語側に拗音が存在しなかったと直ちに断定できるわけではない。古代語の場合、文書語に反映されていない言語層が具体的にどのようなものであるかを推測することは事実上不可能である。現代語でさえも、例えば「ああいう」「おかあさん」「いけしゃあしゃあ」「ぎゃあすか、ぬかす」などに現れるはずの a: について、その語例を比較的硬い書き言葉の中に拾えば、たとえ多量の例が集められたとしても、おそらく、そのすべてが「ラーメン」「シャープ」「パート」のような外来語に限られてしまうだろう。古代語に関しては、残されている文書語の様式が一層限定的であるだけに、拗音を持つ和語の存在が捕捉できずにいるおそれがある。さらに、古代社会において、複数の方言(言語)がたがいに音的側面に関してどのように異なり、そして、それらがどのように共存していたかなどといった問題もある。事柄が古代日本における言語状況の全体像に関わってくるだけに、文献に反映されない部分が、実際のところ、どのくらい大きな問題をはらむのか(あるいは小さな

問題で済むのか否かさえも) 予断を許さない。その内容如何によっては音韻史(さらには日本語史)が現在理解されているのとは異なったものになるかもしれないからである。拗音についても同じ問題が潜んでいる。

解決困難な具体的課題の一つに、擬声語・擬態語における拗音の問題がある。現代語の擬声語・擬態語においては、CjV は重要な役割を果たしている(「ぎよろぎよろ」「ちゃらちゃら」「によるよる」等々)。他方、例えば、ある種の鳥の鳴き声を「クワクワ」「グワグワ」と音写することはあっても、それらはより周辺的な存在にとどまっており、その意味では、CjV と同等に、これらを CwV のような規格化された音型として位置づけること自体が問題になる。これに対して、古代語における擬声語・擬音語の CjV, CwV はどのようなものだろうか。亀井孝(1947)は、日本書紀中のヤタガラスの発言中に、カラスの鳴き声を絡ませたと考えられる表現があることを指摘しており、それによれば「クワ(クワ)」の写音表現の存在が推定される。しかしながら、これが当時の日本語の擬声語・擬態語の中でどのような位置を占めるのかという点までは明らかにし得ない。現代語のような周辺的な位置にとどまるのか、それとも、背後に CwV を持つ擬声語・擬態語が、今日の CjV のそれに匹敵するような組織性を持って存在したのかは不明である。周辺的な写音表現であっても、kwa という漢字音の典型的な音型の枠があてがわれることによって正統性が付与されているということも考えられるので、『日本書紀』のような文献に見えることが、それが周辺的な存在でないことの証左とはならない。

合拗音に関しては、さらに、動詞「くゑ-」(「蹴る」, kuwe- > kwe- > ke- と変化したともいわれている)の問題や、中世における「くわくわらめく」のような語の存在もあり、考えるべき材料は他にも残されている。

また、サ行子音の音価の問題も、拗音との関連において未解決の課題として残されたままである。サ行子音が「シ」「セ」以外の場合でも、口蓋性の要素をその実現の範囲に持っていたとすれば、それが拗

拗音に見る非対称性

音とどのような関係に立つのかという点が問題になっている。また、上代語の音韻体系（とりわけ、いわゆる「上代特殊仮名遣い」）に関わる問題。松本(1995)等を参照)における口蓋性ないしは唇音性についても不明の点が少なくない。

〔記〕

本論文の内容には、科学研究費補助金(2003-2004年度、基盤研究(C)(2)課題番号15520285)による研究成果の一部を含む。

関西音韻論研究会(PAIK)において、本内容に関する研究発表(2005年2月19日、神戸大学)の機会が与えられ、その際の質疑内容が改稿にあたってたいへん参考になった。とりわけ、窪菌晴夫氏、那須昭夫氏、千田俊太郎氏との質疑ならびに談話を通して気づかされた点は数多い。またお名前をすべて挙げることができず残念であるが、参加頂いた方々との質疑はいずれも重要なものであった。この場を借りて厚く感謝申し上げたい。

〔注〕

- 1) 拗音に関する概説としては山口(1989)などがある。拗音の存在を漢語の影響とする見方に対する批判に例えば林(1983)がある。今日では、こうした批判的な見方が主流であろう。
- 2) サ行やタ行子音の場合にも、例えば平安後期に見られる「春 スキン、スキユン…」「出 シキツ…」などの仮名表記のように、原音の唇音性介母の特徴を保持しようと努力した跡がうかがわれるが、結局、日本字音としては、k, gの場合が他に比してより安定的であったらしい(林(1982), 沼本(1986)などの概説を参照)。
- 3) 国語学会(1972)は、漢語(漢字音)の受容と和語の問題に関する討論の内容が記録されており、たいへん興味深い。とくに、(注1)で触れた「漢語の影響」に対する研究者間の認識の相違が端的にうかがえる。
- 4) 漢字音の特質を見極める上で、社会的ないし文化的側面に対する考察がたいへん重要かつ不可欠であることが指摘されている(小松(1995), 湯沢(1996)参照)。また、合拗音をはじめ、漢字音(あるいは漢語)の場面差、位相差による差異に対して、これまで以上に注

意を向ける必要のあることが指摘されている(佐々木(2003, 2004)参照)。

ところで、比較的広い範囲にわたり、方言に一旦は定着したkwa, gwaについては、同じ合拗音でもまた別に考察が必要であろう。この場合、aの持つ広さがそれを保つ音的条件になっているが、それだけでなく、話し言葉の中にどのように漢語が入っていったのかに関する社会言語学的側面にも目を向ける必要がある。ただし、開拗音を持つ漢語が(個々の字音の強い束縛を離れて)話し言葉に取り入れられる過程においても同様のことが考えられるので、そのうえで二つの拗音の間でどのように違うのかを見なければならぬ。

- 5) 肥爪(2001)は、開拗音(とりわけウ列開拗音Cju)を中心に、漢字音の具体的な仮名表記のあり方とその背後にある問題を精密に論じている。新しい切り口で拗音の問題が扱われており、示唆に富む。
- 6) 橋本(1950)によれば「(開合両拗音は)初の中は外国語式の音と感ぜられたであらうが、年を経るに随つて之に慣れ、国語の正常な音として後には本来の国語にも用ゐられ、…今日に及んである」という。本稿ではこの考え方を取らない。橋本のこの見解は、「口の開きの狭いものから広いものへ」という「国語の音節構造の特質」を主張する一環として提示されたものである点に注意を要する。
- 7) ケウ→キョウ、セウ→ショウ、…のように変化したのは、エ列音節全般にCjeのような口蓋性の要素を有したことに依るとの指摘がある(ラング(1971))。しかし、本稿で述べることは、これがいずれであっても基本的に影響を受けない。また、本節の内容は、高山(1992)に手を加えてある。

参考文献

- 上村幸雄・高田正治(1978)『X線映画資料による母音の発音の研究』(国立国語研究所報告60), 東京。
- 亀井孝(1947)「八咫鳥はなんと鳴いたか」(『日本語のすがたところ(一)』(亀井孝論文集第3巻)東京:吉川弘文館, 423-436.による)。
- 窪菌晴夫(1998)『音声学・音韻論』第2章18-21, 東京:くろしお出版。
- 国語学会(1972)「(国語学会大会分科討論会記録)漢字音と国語音—中世を中心に—」『国語学』90, 67-74。
- 小松英雄(1995)「日本字音の諸体系—読誦音整備の目的を中心に—」築島裕編『日本漢字音史論輯』13-37, 東京:汲古書院。
- 齋藤純男(1997)『日本語音声学入門』, 93, 東京:三省堂。
- 佐々木勇(2003)「日本漢字音史における位相的研究」『国文学』48: 4, 62-66。

特集「音韻構造における非対称性」

- 佐々木勇(2004)「金沢文庫本『群書治要』と久遠寺蔵『本朝文粹』との漢字音の比較—鎌倉時代中期における漢籍と和化漢文との字音注の差異について—」『音声研究』8: 2, 26–34.
- 高山知明(1992)「日本語における接続母音の長母音化—その歴史的意味と発生の音声的条件—」『言語研究』101, 14–33.
- 高山知明(2003)「現代日本語の音韻とその機能」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』第2章, 22–42. 東京: 朝倉書店.
- 沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』(『国語学叢書10』) 東京: 東京堂.
- 橋本進吉(1942)「国語音韻変化の一傾向」(1950『国語音韻の研究』(橋本進吉著作集第四冊) 東京: 岩波書店, 262–271. による).
- 橋本進吉(1950)「国語の音節構造の特質について」『国語音韻の研究』(橋本進吉著作集第四冊) 東京: 岩波書店, 229–260.
- 林史典(1982)「日本の漢字音」中田祝夫『日本語の世界4』第5章, 東京: 中央公論社.
- 林史典(1983)「中古漢語の介母と日本呉音」『文芸言語研究 言語篇』8, 165–183.
- 肥爪周二(2001)「ウ列開拗音の沿革」『訓点語と訓点資料』107, 1–18.
- 松本克己(1995)『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈—』東京: ひつじ書房.
- 山口佳紀(1989)「II-1 日本語の歴史 音韻」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』「日本語」の項(『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』所収による, 161–162.) 東京: 三省堂.
- 湯沢質幸(1996)『日本漢字音史論考』第1章 東京: 勉誠社.
- ラング, ローランド(1971)「文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性」『国語学』85, 36–42.